

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「アジア地理言語学研究」平成 29 年度第 1 回研究会

日時：平成 29 年 8 月 5 日（土）13:00-18:00, 8 月 6 日（日）10:00-17:00

場所：AA 研大会議室(303)

以下は各人による要約：

Katsuhiko SHIOTA (Osaka University), “Toneme and allotonic distribution in Yoruba”,

Three level tones, high, mid and low, are observed in Yoruba. These are considered to be tonemic. Tonal environment according to sequences of these three level tones, causes two contour tones, rising and falling, which are considered to be allotones. Furthermore, elision of vowels between morphemes causes downstep mid and special high-low sequence, which does not occur in normal sequences.

Kosuke MATSUKAWA (Aoyama Gakuin University & Keio University), “Tone in Triqui languages”, “Tone in Central American Languages”

最初の発表では、オトマンゲ語族に属するメキシコのトリキ語系の三言語（コパラ・トリキ、チカワシュトラ・トリキ、イトゥニョソ・トリキ）の声調に関して、歴史言語学的な分析にもふれつつ紹介した。次の発表では、中米で見られる声調言語の概要をその地理的な分布とともに紹介し、中米の声調言語の研究がアジアやアフリカをはじめとする世界の声調言語の研究とどのように関係しあっているのか、声調言語の普遍性などいくつかの観点から紹介した。両発表ともに直接的にはアジアの声調言語に関するものではないが、アジアの声調言語との比較例もいくつか挙げており、アジアの声調言語の研究にも役立つ内容の発表であったものと考えている。

Ray IWATA (ILCAA Joint Researcher, Kanazawa University), “Tone Sandhi in Chinese”

漢語方言には連読変調(tone sandhi)と呼ばれる声調の交替現象がみられる。本発表では、声調交替の条件(condition)と結果(output)に着目し、①当該の声調交替が前後の音節の声調を条件とするか否か (conditional type vs. unconditional type)、②変調の結果が基本声調（通常は単音節で実現される声調）と一致するか否か(categorical type vs. non-categorical type)という二つの基準を立て、それによって類型化した結果を地図に表現した。

①の基準によれば、conditional type は官話地域と閩東を中心とする地域に遠隔分布し、unconditional type は北部呉語、湘語など長江南岸地域及び閩南を中心とする地域に分布する。官話と閩東は、いずれも非末位音節の声調が後続声調の影響を受ける点で共通するが、内実はかなり異なる。非末位音節における声調のふるまいは、官話では変調単位内の位置に関わらず anticipatory だが、閩東では後ろから二番目の声調だけが末位音節声調の影響を受け、末位から遠い音節になると後続音節の如何に関わらず唯一の中和調となる傾向がある。

②の基準は①とかなり連動し、conditional type の声調交替は、その output が categorical

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

であることが多く、**unconditional type** の声調交替は、**output** が **non-categorical** な平板調として実現される傾向がある。後者は声調合流(**merger**)の産物である。ところが、閩南の **unconditional type** では、その **output** が **categorical** になる。これは合流を避けるために、連鎖変化(**chain shift**)が起きたためである。

以上二つの基準のほかに、“第一音節優位 vs.末位音節優位”という基準が必要である。通時的に見れば、これはストレスの位置の違いによって一方言内部に生まれた差異である。単語的な複合語は第一音節優位型を取り、フレーズは末位音節優位型をとる傾向がある。ある方言の変調が、“第一音節優位型” 或いは “末位音節優位型” と呼ばれる時、それはたぶん出現頻度が高い方に着目したためである。

Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima), “Accent in Japanese”

Japanese dialects bear a variety of accent system including the accent pattern of standard variety of Tokyo. We show the distribution of accent system of various types in Japan and features of each accent system. From the phonological point of view, there are mainly four types of accent such as Tokyo type, Keihan type, N pattern type and accentless type. We show the classification of Japanese accents in detail and explain about feature of each types.

Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University), “Accent in Mongolic and Turkic”

チュルク系・モンゴル系の諸言語は基本的には弁別的なアクセントを持たない。音声レベルのアクセントに関しては、その性質や置かれる位置について複数の説があり、また例外的な語もあるが、概略、チュルク系は最終音節に、モンゴル系は青海省・甘粛省の諸言語は最終音節、それ以外は第一音節にアクセントが置かれる、として地図を描いた。また、どちらの語族にも弁別的なピッチを発達させてきている言語があることを付け加えた。

Hidetoshi SHIRAISHI (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University), “Accent in Nivkh”

Accent in Nivkh is fixed to the first syllable in a polysyllabic root, although previous descriptions report words with accent on the second syllable from the left, especially in the Sakhalin dialect. The latter accentual pattern is not observable from the speech of the contemporary speakers, though. An ongoing investigation by Shiraishi and Botma (2015) examines these descriptions by measuring duration of the first and the second vowel per dialect.

Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, Sapporo Gakuin University), “Accent in Ainu”

アイヌ語は、ピッチアクセント (pitch accent)、長さアクセント (quantitative accent)、

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

無アクセント (none) の方言に分かれている。母音の長さで区別を行うのは樺太方言であり、ピッチアクセントと無アクセントは北海道方言に見られる。千島方言に関しては音声資料が残っていないため確認できない。ピッチアクセントを持つ北海道方言は、第一音節が開音節の場合、ahún (「入る」) のように第二音節の母音に上り核がくる。ただし、réra (「風」) のように例外的に第一音節の母音に上り核アクセントがくることもあり、樺太方言ではこれが reera [re:ra] のように長母音として実現する。この規則的な対応関係について、服部 (1967) はアイヌ語祖語に *CVVCV, LHL をたて、樺太方言が祖語の母音の長短の区別を保持したとしている。一方、nocíw (北海道) : noociw (樺太) のように北海道方言の上り核の位置と樺太方言の長母音が対応しない場合も少数見られる。服部 (1967) が提示する再建形に関しては、服部以降ほとんど進んでいないという現状があり、今後の音声研究によって再建形は更新されるものと考えられる。

Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies), “Accent in Arabic”

アラビア語は全般的に、前末音節にストレスアクセントが置かれるタイプである。その多くは、前末音節が軽音節 (CV) であるとき、もう 1 つ前に置かれる。この時エジプトカイロ方言は、1 つ前の音節が重音節 (CVC あるいは CVV) であると、前末音節にとどまる。マルタ語とキプロス方言は、母音の長短区別が失われ、その代わりに、元長母音にアクセントが置かれることで、一部、アクセントが弁別的になっている。またケニア・ウガンダのヌビアアラビア語は、トーンタイプである。

Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies), “Accent in Uralic and Tungusic”

ウラルとツングースを含むシベリア諸語の研究においては、アクセントや声調はあまり詳細に取り上げられる分野ではなく、先行文献の記述の精密さや量は言語により差がある。そのような中、アクセントのタイプをクラス分けしてみると、まずアクセントが弁別的に機能する言語はないと言える。またアクセントの位置が固定的かあるいは移動的かについては、多くの言語では固定的といえる一方、少ない言語では語により位置が異なるものがあつた。これらの分布についてまとめると、ウラル諸語では語頭にて固定的 (A1 タイプ) が主で、ツングース諸語では語末にて固定的 (B1 タイプ) が主である中、シベリア中心地域では非固定タイプ (A2, B2 タイプ) が見られるという分布がわかつた。

Rei FUKUI (The University of Tokyo), “An overview of the accent/tone systems found in Korean dialects”

本論は韓国語の諸方言に見られるピッチアクセントあるいは声調の体系の概要を報告するものである。韓国語では、ソウルを中心として、その周囲の京畿道、それに接す

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

る忠清道，黄海道，平安道と済州島には弁別性をもつピッチアクセントおよび声調は存在しないが，半島北東部の咸鏡道方言と，南東部の慶尚道方言には弁別性をもったピッチアクセントないし声調が存在する。また南西部の全羅道方言については研究者によって意見は異なるが，少なくともそのうちのいくつかの方言は，セグメンタルには予測できないいくつかのピッチパターンの種別が存在する。

なお，弁別性のあるピッチの体系については，それがアクセントなのか声調なのかについて議論が行なわれてきたが，咸鏡道方言はアクセント的，慶尚道諸方言はアクセント的要素と声調的要素が入り混じっており，こうした点に基づいて，諸方言の体系の分類を行なった。

地理的分布に関しては，概要は分かっているが，いまだ行き届いた調査が行なわれていない地点が多く。今後の課題となる。

最後に諸方言のアクセントおよび声調体系についての，歴史的な比較研究の概要を Fukui (forthcoming) “Accent shift in Japanese and Korean”(Journal of Asian and African Studies. 94. ILCAA, TUFS.)に基づきつつ紹介した。

Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies), “Tone in the Seoul Dialect of Korean”

現在のソウル韓国語では，語頭子音によって 2 つの音調形が見られる。低、ゼロ、高の 3 レベルで見ると，語頭が平音 ($PTCK$) か共鳴音 ($mnrwj$) の単語は，第 1 音節が低、第 2 音節がゼロレベルになり，語頭が激音 ($p^h t^h c^h k^h$) か濃音 ($p' t' c' k'$) か摩擦音 ($s s' h$) の単語は第 1、第 2 音節が高レベルで実現する。語頭子音によって音調形が決定される傾向は近年，いろいろな実験研究で指摘されてきており，3 段階モデルは山崎 (2013) が提唱した。また，新しい世代では平音と激音の VOT が同値になりつつあり，弁別素として音調形が使われることが多く，声調発生の可能性があることを Silva (2002) が指摘している。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), “Tone in Tai-Kadai”

今回は地点数が 300 を超えた。タイカダイの単音節における声調の祖語からの分岐タイプに基づき，A 型：祖型，ABCD の 4 声調(ただし D は -p, -t, -k で終わる音節タイプのみ)に現れ ABC と相補分布をなすのでトネームとしては 3 つとなるが，声調数は音声レベルで数える，以下同)，海南島のリー語に見られるものの，カダイ語とタイ(Tai)語間の声調の対応関係はあまり規則的ではない。13 世紀のラームカムヘーン大王碑文に始まり現在のシャム語の正書法にも受け継がれている体系がこの型に属する。B 型：音節頭子音の有声性による分裂を経ており，A1,2, B1,2, C1,2, D1,2 の 8 声調，リー語・チワン語・プイ語の一部方言に見られる。C 型：D 調が更に母音の長短によって分裂，D1L,S, D2L,S の 10 声調，今回扱った全 318 地点のうち 132 地点を占め，タイカダイで最も多いタイプで，チワン語・プイ語ではこのタイプが内側，B 型が外側に分布するが，北タイやミ

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

ランマでも見られる。D型：無声が有気・無気によって分裂，有気のほうをA1'などで表すと，A1',1,2, B1',1,2,C1',1,2, D1',2,3L, D1',1,2S の15声調となる。ドン語に典型的な形で現れるが，有気音が更に無気音に合流している方言ではトネームとしても分岐していることとなる。ただしA調は分裂している地点が最も多いが他の声調はすべての対立を示すとは限らない。以下はこの型から更に合流を様々の程度に経たタイプとなり，主としてタイ王国やラオスに分布する。E型：A1'=B1' と A1=B1 の合流が生じたもので，タイ王国南部の半島部に見られる。F型：C1=C2 が同一調類として現れ，タイ王国東北部とラオスに見られる。G型：F型と同じ特徴の他，更に B1'=B1=B2 が同一の調類で現れ，地理分布としてはF型よりも内側に分布する。H型：A1=A2, B2=C1 が同一の調類で現れ，バンコク付近に限られる。I型：A1=A2=B1, B2=C2, D1L=D2L が同一の調類で現れ，タイ王国東北部の Sakon Nakhon と Wanonniwat に見られる。通時的にはおおむね以上のA型からI型の順番に変化が進行していったものと考えている。

Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University), “Tone and Register in Austroasiatic”

オーストロ・アジア諸言語を、プロソディーに関わる5つの音韻特徴（頭子音の有声性対立の有無、母音の長短対立の有無、レジスター対立の有無、レジスター対立の代償としての母音の変化、声調対立の有無とその数）によって、12のタイプに分類し、その分布を地図上に示した。最も外縁に分布する諸言語（Vietic, Palaungic）における声調の存在を漢語やタイ系言語からの影響と認めるならば、その内側で比較的外縁に分布する Palaungic の Lawa と Bahnaric の Loven, Brao, Stieng 等が頭子音の有声性の対立を保存し、その中間に位置する Katuic, Khmeric, Monic, Pearic 諸言語においてはレジスター対立が発達している事実は注目に値する。同様に、母音の長短対立を有する Khmuic 諸言語も保守的である。

Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University), “Tone in Hmong-Mien”

本報告では、ミャオ・ヤオ諸語における声調の歴史的発展に着目して地図を描いた。ミャオ・ヤオ諸語においては、祖語の4つの声調が音節頭子音における発声様態の違いを条件として分岐するという変化が大多数を占めている。そこで、それら条件の違いを地図上にプロットした。データからは以下のようなことが推測される。声調分岐を起こしていないミャオ語に属する言語（方言）があり、したがって、声調分岐は個々の言語・方言のレベルで起きたに違いないこと。音節頭子音の有気・無気の対立に起因する分岐は、ミャオ諸語、ミエン語諸語のいずれのブランチにおいてもやや南側に偏って分布するので、他の語族の言語との接触の可能性が考えられること。

Kazue IWASA (JSPS/Kyoto University), “Tone in Tibeto-Burman”

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

Our data is based upon 525 Tibeto-Burman (TB) languages and dialects for the classification of tone and / or accent system. Additionally, 448 TB languages and dialects are analysed for examining if there is correlation between tone, accent and phonation.

As a result, tonal languages and dialects are spread around Lijiang as their centre, whereas those with neither tone nor accent are scattered along the Himlayas.

Along the line Muli-Lijiang-Northern Assam, word-tonal languages and dialects (WT) are split from syllable-tonal languages and dialects (ST). As for the distribution of the languages and dialects with or without phonation, phonation languages and non-phonation languages are parted along the line Muli-Lijiang-Western Myanmar.

Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology),
“Suprasegmentals in Tibetic languages: from a geolinguistic perspective”

本発表では、チベット文化圏東部に分布するチベット系諸言語・諸方言について、それらに認められる超分節音素について声調・レジスター・プロソディーに基づき分類し、その差異を地図上に表した。レジスターの差異は、それぞれ小さい分布範囲を示し、また音韻的な体系の一部であることから、地図から歴史を読むことが困難であることが分かった。一方で声調をもつ言語について見ると、特徴的なプロソディーをもつ地域は方言の下位分類を越えて特定の地域にかたまって分布しており、またそれが音声的特徴の一部であることから、方言差異を越えて伝播したものと分析できることを示した。

Kenji YAGI (ILCAA Joint Researcher, Kokushikan University), “Citation Tone in Chinese”

中国語方言における単音節声調の音声的声調数と音韻的声調数の二つの地図を作成した。二千地点以上のデータを入力した詳細な地図により、声調数が南から北に向かい減少して行くという橋本萬太郎の論考を検証した。音韻的声調数の地図からは、北方において多元的に声調の減少が進行する様子が看取される。